神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Perception and Linguistic Form: A Cognitive Linguistic Analysis of the Copulative Perception Verb Construction

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2018-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: tokuyama, kiyomi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2409

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

論文内容の要旨

徳山 聖美

1. 研究の目的

話者の事態把握の仕方が言語形式にどのように反映されるのかについて考察することが、本研究の目的である。具体的には、(a) *John looks happy;* (b) *That sounds reasonable;* (c) *This cake tastes good;* (d) *This cloth feels soft;* (e) *This flower smells sweet* のような連結的知覚動詞構文 copulative perception verb construction (CPV 構文) について、認知言語学的観点から共時的・通時的に観察する。その過程で、この構文の拡張のプロセスについて考察を加え、CPV 構文が独特の形態と機能を獲得するに至った経緯を明らかにする。本研究はまた、この構文の統語的な偏りについて語用論的要因がかかわることを指摘する。さらには、CPV 構文を類似構文と比較することで、当該構文の特徴を構文内だけでなく構文外の情報も加味して明らかにする。本研究は、このように複眼的な視点を取りつつ、CPV 構文について包括的な分析と記述を行う。

本研究の手順は、次の 3 点で従来の研究と大きく異なる。第一は CPV 構文における 5 つの代表的な知覚動詞（*look, taste, feel sound, smell*）に視覚を表す *appear* を加えることである。これまで CPV 構文については、1 つの知覚モダリティに対して 1 つの主要な知覚動詞を措定し、知覚動詞を 5 つに限定していた（Rogers（1971）、Viberg（1984）、Taniguchi（1997）、本多（2005）、Gisborne（2010）など）。しかし、視覚に関しては（1）のように *look* と *appear* が生起可能であり、実際に 2 つの動詞は（あまり意識されることはないものの）微妙なニュアンスの差を伴って使い分けられている。

(1) a. John looks happy.
　　b. John appears happy.

つまり従来の研究では、*appear* は CPV 構文にとって重要な動詞であるにもかかわらず、考察対象から除外されてきた。本研究では上述の 5 つの知覚動詞に *appear* を加え、どのように刺激を認識するかによって知覚動詞を刺激放出性知覚動詞（*appear, sound, smell*）、能動的知覚動詞（*look, listen* など）、そして受動的知覚動詞（*see, hear* など）の 3 つに整理する。このうち受動的知覚動詞は CPV 構文に生起することはなく、刺激放出性知覚動詞と能動的知覚動詞（の一部）が CPV 構文にかかわる。元来 *seem* に存在していた CPV 用法が *appear* に受け継がれ、その後、刺激の出現・放出を表す *sound/smell* と能動的知覚を

表す *look/taste/feel* の２つのパタンに分かれて発達して行く。このプロセスを、認知に関わる時間のメトニミー、各知覚動詞の歴史的出現順序、および中間構文との比較の観点から明らかにする。

第二はディスコース・レベルのデータを注意深く観察し、文脈的要因に焦点を当てることである。これまで考察の対象は（1）のような単文のデータに限定される傾向が強かったが、*look* と *appear* のように、英語母語話者が無意識に使い分ける際の要因を探るには、それだけでは難しい場合がある。本研究は実際のディスコースに生起するデータを必要に応じて、その文脈ごと利用する。そうすることで、考察に関わる情報量が一挙に増えることになる。そのうえで、*look* と *appear* が共起するテクストを観察し、２つの動詞が使い分けられる際の認知的動機づけを考察する。さらにインフォーマント調査から、分析の結果について検証を行う。本研究では、補部に形容詞を共起する CPV 構文を対象とし、扱う形容詞は全て *look* と *appear* 両方に共起できることを確認済みである（つまり、入替えが完全に可能な形容詞を考察の対象とする）。

第三は、今まで取り上げられることがほとんどなかった、(2b)のような類似構文との比較によって、CPV 構文に関わる事態把握の方法を明らかにすることである。

(2) a. John looked happy.
　　b. I saw John happy.

「知覚主体である話者が、知覚対象（John）を見て、その知覚内容（ジョンはしあわせである）を述べる」という点で両者は共通しており、両構文を比較することで共通の事態に対する話者の事態把握のパタンの違いを明らかにすることができる。本研究では、(2b)のような表現を他動的知覚動詞構文 transitive perception verb construction（TPV 構文）と呼ぶ。コーパスによる実例とインフォーマント調査から、この構文が現れやすい事態を調査したところ、過去・完了形、三人称（知覚対象）、一時性を表す状態形容詞というような形式的偏りが見られた。両構文の事態把握のパタンを比較することによって、CPV 構文の認知的メカニズムがさらに明瞭になる。

これらの方法論の違い（特に第１と第２の違い）がもたらす意義については、次の２節と３節で述べる。

2. 分析に *appear* を加える意義

分析に刺激の出現を表す *appear* を加えることによって、以下のような問題を

提起し、それに対して妥当な答えを提示することができる。

(a) ひとつの状況に対する事態把握の違いが、(1) のような *look* と *appear* の選択に反映されることを示す。英語母語話者が無意識に行うこのような使い分けが、偶発的・無作為なものではなく、認知的要因による両者の分業（認知的分業）によってなされていることを説明する。

(b) 元来知覚対象（刺激の発生源）を主語にとる *appear* は、CPV 構文での主述関係が自然であるのに対し（*John appeared; John appears happy*）、*look* は、CPV 構文では知覚対象を主語にとり、本来の主述関係に齟齬をきたす（*I look at John; John looks happy*）。*Look* への発達に既に存在していた中間構文（*I read this book; This book reads easily* [中間構文]）が影響していることを示す。その結果、*look* と *appear* の分業が可能になったことを説明する。

(c) 同一テクストにおいて、*look* と *appear* が共起する際の出現順序に着目すると、*look* が先行するものが量的に多い。*Look* は対象との心理的距離が近く、確信度の高い判断を表す際に選択されることが多いことから、まず興味・関心の高いものについて先に述べ、次に他方について言及するという、私たちが対象を認知する際のデフォルトのプロセスが、言語にも反映されていることを明らかにする。

(d) 同一テクストにおける CPV 構文の形容詞補語に着目すると、比較級と共起するのは *look* より *appear* の方が多い。この事実から、知覚主体が判断・評価した対象の「見えと実質との乖離」がより大きい場合を *appear* が受け持つ傾向があることを示す。

(e) 例えば *You look beautiful* とは言えても、*You appear beautiful* が好ましくない理由を、*appear* が持つ「より確信度が低く、間接的判断を表す」という意味から説明する。*Look* は目の前にいる対話者（二人称）について評価する際に、*appear* はその場にいない三人称に多く使用されるという人称の偏りを、対人コミュニケーションの観点から説明する。

(f) 否定的意味をもつ形容詞補語には、確信度の高い判断を表す *look* よりも、間接的判断を表す *appear* が共起しやすい事実を示し、両動詞の分業を対人配慮の観点から説明する。

(g) (f)とは異なる状況において否定的評価を表す場合、例えば本来なら、対人配慮の観点からは好ましくないはずの *You look sad* の方が、*You appear sad* よりも、相手に対する共感を表すことを Brown and Levinson (1978) の positive politeness strategy の観点から説明する。

(h) *Appear* と同様に、刺激の出現・放出を表すコピュラ動詞 *loom* と *ring* を

CPV 構文の周辺的な拡張として説明できる（e.g. *The budget deficit will loom larger; His words indeed ring true*）。

(i) 聴覚を表す CPV では、なぜ *listen* ではなく *sound* が選択されるのかについても、出現を表す *appear* からの拡張であることから自然に説明できる。また、ごく限られたコンテクストにおいては、*listen* も選択される場合があることを示す。

3. 認知言語学的分析にコンテクストを伴うデータを用いる意義

認知言語学では、言語表現は概念内容を表すだけでなく、主体の概念化のプロセスも反映していると考える。ダイナミックな言語使用の場における、主体の認知活動を言語分析に取り入れることで、英語母語話者の無意識的な選択の中に認知的動機づけを見出すことができる。つまり、どのような認知的要因が、どのような形で組み込まれているかを考察することで、言語表現の意味とメカニズムを明らかにできる。

構文が生起するコンテクストを捨象し、文自体の構文的な意味だけを問題にする、従来のような当該の文のみによる観察だけでは、認知言語学が主張する、主体の対象に対する把握の仕方やパースペクティヴを十分に観察することができないことがある。そのような場合には、認知言語学の研究を遂行するためにも、一定のコンテクスト内でどのような言語行為が行われているのかを、詳細に観察する必要がある。実際に、CPV 構文を文レベルで提示した場合、*look* と *appear* はほぼ入れ替えが可能であったにもかかわらず、コンテクストを提示すると、両者はほとんどの場合、入れ替えることができない。このことから、両者は適切に使い分けられていることが明らかになる。以上のことから、認知言語学にコンテクストを伴うデータの検証を導入することは、他の言語現象の成立や拡張の動機づけをも、より明確に示すことのできる有効な方法論であるといえる。さらに、隣接分野である文体論、テクスト分析などに、認知言語学の観点から貢献できる可能性を示すことができる。

4. 構成

本研究の構成は以下のとおりである。

第 1 章　本研究の概観を述べる。

第 2 章　分析に採用した概念に関する理論的枠組みを明らかにする。

第 3 章　CPV 構文について概説した後、知覚構文を扱ううえで基本となる、知覚動詞に関する代表的な研究（Rogers 1971、Viberg 1984）を概観する。

第 4 章　CPV 構文に関する主要な先行研究（Taniguchi 1997、2005、本多 2005）について考察する。

第 5 章　CPV 構文分析の基本となるコピュラ動詞についての先行研究（Quirk et al. 1985、Visser 1963、Horton 1996）を検討したうえで、*seem* と *appear* の意味と振舞いについて詳細に述べる。これまでの主な知覚動詞の分類を 5 つ挙げ、本研究における新しい分類を提示する。さらに、非母語話者にとって特殊に思える CPV 構文が、因果関係（原因・プロセス・結果）に着目する人間の認知に合致した自然な構文であることを、時間的メトニミーの観点から明らかにする。

第 6 章　文レベルでの観察の限界を示し、認知言語学的分析にコンテクストを伴うデータを用いることの意義を示す。*Look* と *appear* が使い分けられている言語事実を提示し、そのデータを綿密に観察することで、2 つの動詞の認知的分業について考察する。

第 7 章　CPV 構文が現在のように発達した結果、*look* と *appear* の認知的分業が可能になったことを明らかにする。まず、CPV 構文に見られる主述関係の不均質性（*sound/smell* vs. *look/taste/feel*）を示す。構文拡張の方向に、出現動詞 *appear* から意味的・統語的類似性による自然な拡張である *sound/smell* と、意味的には視覚的知覚という類似性と、統語的には中間構文の存在という動機づけによる拡張である *look* へ（その後、同じ能動的知覚を表す *taste/feel* へ）という 2 つのパタンがあることを主張する。さらに、CPV 構文の歴史的発達と周辺的拡張についても説明する。

第 8 章　同一テクストにおける *look* と *appear* の出現順序に着目し、*look* 先行型が *appear* 先行型より量的に多い事実を示し、質的な分析から、それが私たちのデフォルトの認知プロセスが言語事実にも反映されていることを明らかにする。量的に少ない *appear* 先行型の理由についても、レトリック上の要因から説明を行う。さらに、両タイプとテクストのジャンルとの関係も示す。

第 9 章　*Look* と *appear* の分業に、語用論的要因も関わっていることを示す（2 節の（e–g）参照）。

第 10 章　CPV 構文と類似する TPV 構文の意味と形式を提示する。両構文を知覚のプロセス、近接的・遠隔的モード、内・外のパースペクティヴ、視座の移動による自己の客体化、主体性の度合の観点などから比較した結果、共通の事態に対する事態把握のパタンの違いが、２つの構文選択に反映されていることを明らかにする。

第 11 章　本研究の結論と今後の課題について述べる。